

ポルトフェッライオの建都

松 本 典 昭

序～エルバ島

ティレニア海に面したイタリア中部のトスカーナ地方には、ゴルゴーナ島、カプライア島、ピアノザ島、ジリオ島、モンテクリスト島、ジャンヌートリ島などの群島があり、なかでも最大の島が陸地から約10キロの沖合いに位置するエルバ島である。最大とはいっても、東西27キロ、南北18キロ、総面積は223.52平方キロメートルというのだから、決して大きな規模ではない。全長147キロにおよぶ島の海岸線は複雑に入り組み、大小さまざまな岬と入江を形成している。

現在は対岸のピオンビーノからフェリーが出ていて、エルバ島北岸の中心都市ポルトフェッライオまでは約1時間の船旅である。またリヴォルノからゴルゴーナ島、カプライア島を経由して、エルバ島のマルチャーナ・マリーナに到着する約5時間ののんびりとした船旅のコースを選ぶこともできる。空は蒼く澄み渡り、海は限りなく透明に近い。頬に涼風を受けて、島影がしだいに大きくなるときの胸の高鳴りは何とも形容しがたい爽快さである。1月の平均気温が9度、7月の平均気温が24度だから、寒からず暑からずの快適な、イタリア語でいうドルチェ（甘美）な気候である¹⁾。ウェルギリウスを初めとする幾多の詩人がエルバ島（ラテン名「イルヴァ島」）を讃えてきたのも頷ける。

島の最高峰は、西側にそびえる標高1018メートルのカパンネ山。この花崗岩の山にはトルマリン、緑柱石、長石、ザクロ石、蛇紋岩、斑岩なども含まれる。ブドウとオリーブが栽培され、

サボテン、リュウゼツラン、ヤシ、栗などはいたるところで見かける。野兎も多い。海にはヒシコイワシ、マイワシ、サバなどがいる。しかしこの島の豊かさを数十世紀にわたって支えてきたのは、農業でも漁業でもなく鉱業であった。島の東部の峻険な岩山の内部には赤鉄鉱、磁鉄鉱、褐鉄鉱などの鉄鉱石が豊富に眠っている²⁾。エルバ島は「鉄の島」なのである。

古来、鉄は人を惹きつける磁力をもつ。先史時代にはリグーリア人が住んでいたと思われるが、前10世紀から前6世紀にはギリシア人が、前6世紀からローマ時代にかけてはエトルスキ人が、そしてローマ時代にはローマ人が、鉄鉱石を求めて島にやって来た。ローマ人は瀟洒な別荘も建設し、その遺跡がいまも島に点々と残っている。中世初期にはトスカーナのロンバルド族の諸公が島を治めたこともあったが、11世紀から14世紀末まではピサ人がサラセン人やジェノヴァ人の攻撃を退けながら島を領有した。しかし1399年には、ピサがヴィスコンティ家に島を売却したことにより、ヴィスコンティ家がアッピアーノ家のために建国したピオンビーノ公国の一部に編入される。アッピアーノ家の支配するピオンビーノ公国に目を付けたのが、本稿で述べる16世紀のメディチ家である。その後、スペイン、フランス、オスマン帝国も加えた争奪戦が繰り広げられるが、1796年にはイギリス領、1799年にはフランス領、1815年にはトスカーナ大公国領、そして1860年にはイタリア王国領となる。

わが国ではエルバ島と聞いて連想されるのはただひとつの出来事であろう。すなわちひとり

の男がこの島に滞在したこと。1814年5月3日から1815年2月26日まで。1年にも満たない滞在期間、いな、流謫期間であった。男の名前は、もちろんナポレオン・ボナパルト(1769-1821)。帝位を奪われ、そしてふたたび帝位に返り咲くことになる男である。ナポレオンの住んだ質素な家はいまでもポルトフェッライオの住宅地の高台に残っている。

そのポルトフェッライオを建都したのが、フィレンツェ公コジモー世(1519-74)にほかならない。「ポルトフェッライオ」とは「鉄の港」の意味である。この新都市は16世紀には「コスモポリス」もしくは「コスモーポリ」とも呼ばれた。これは文字通りには「コジモの都」という意味であるが、同時に「宇宙^{コスモ}の都」すなわち宇宙的秩序をもつ理想都市という意味でもある³⁾。コジモー世はサント・ステファノ騎士団を創立する以前から、海に面した理想都市としての要塞都市建設に乗り出し、地中海支配への強い関心を示していたのである。

I コロンナとベッルッチの要塞建設

コジモー世は1537年にフィレンツェ公に即位すると同時に、皇帝カール五世の陣営内にしっかりとした足場を築いていたが、アルジェ遠征失敗(1541年)と第4次イタリア戦争突入(1542年)で苦境に陥っていた皇帝に対して、コジモはイタリア内において、とくにピオンビーノ公国とシエナ共和国に対する皇帝の影響力に取って代わろうとする野心を抱く。ちょうどその頃、フランス王フランソワ一世が、同盟国のオスマン艦隊をトスカーナに派遣して攻撃させた(1543年、44年)が、このオスマン艦隊の脅威が、はからずもコジモの重要性を皇帝に再認識させる結果になった。当時国内の対ルター派問題に忙殺されていた皇帝は、トスカーナ沿岸の防衛をコジモに任せることにし、コジモはコジモで「皇帝の番犬」の役割を忠実に演じて見せた。その褒美として、1548年に皇帝はコジモにエルバ島を含むピオンビーノ公国を一旦は与え

たが、すぐにまたポルトフェッライオを除くピオンビーノ公国のほうは取りあげてしまった⁴⁾。ともあれポルトフェッライオだけは手に入れたコジモが、その支配権を確実にするために早速新都市建設に乗り出すのである。

新都市建設は2つの計画から成り立っていた。まず第一は、自然の入江を見おろす丘に要塞を築くこと。次に第二は、要塞都市自体を築くことである。

さて、1548年4月上旬、コジモー世が要塞建設の許可を皇帝カール五世から得ると、早速同月、ジョヴァンニ・バッティスタ・ベッルッチ通称サン・マリーノをエルバ島に派遣し、新都市の建設予定地に要塞を築くことを命じた。ベッルッチのそばには、軍事問題の専門家ピッコ・コロナとオット・ダ・モンタゲートがいた。

要塞の設計は、ベッルッチ、コロナ、モンタゲートの3人に委ねられ、彼らがふたつの丘の上に「ステッラ(星)」と「ファルコーネ(鷹)」と命名されたふたつの要塞の設計図を作成することになった。ところが建設用地の選定をめぐる、ベッルッチはコロナおよびモンタゲートとことごとく意見が対立し、両者の間にぬきさしならない亀裂が生じる。そこで早くも2カ月後の6月上旬に、コジモー世はベッルッチを更迭し、代わりにジョヴァンニ・カメリーニを派遣する。モンタゲート宛コジモ書簡にいわく、「彼〔ベッルッチ〕の代わりにカメリーニを派遣した。カメリーニはそちらに留まり、われわれの意思を体現するであろう。貴殿らは彼に全幅の信頼を寄せ、そちらにいる親方と棟梁の全員を彼に従わせねばならない。」⁵⁾

しかしこの2カ月という短期間のうちに、ベッルッチが要塞の設計と建設に向けて、いかなる貢献をしたのかということを考えてみる必要がある。彼は設計図を同封した次のような4月27日付の書簡をコジモ宛に送る。

「私がこちらに到着したとき、ビボーナの対壕兵(guastatori)15人がいました。彼らは早速道路建設にとりかかり、小さい丘の周辺を整備しました。それからピッコ〔・コロナ〕氏

が全域を視察し、考察し、ふたつの丘のうちのどちらに今すぐ着手しうるかを検討し、議論百出の後に、結局、実際見晴らしがきいて敵を攻撃しやすい丘よりも、小さい低い丘のほうを彼は選択しました。もう一方の丘から彼が受ける攻撃については、真正面を向いて逃げることになり、それは実際以上の勇気を〔自軍に〕強いることになります。ピッコ氏とオット〔・ダ・モンタグート〕氏がこのような結論を出したように、その形態についても大変な作業を要する結論を出しました。事実、ピッコ氏とオット氏は大変な苦勞に直面しています。こんな事に長時間の議論の要はなかったと愚考いたします。実際、敗北を望まない者は、そこに良い形態を見出すことができません。私は全然満足しておりません。とはいえ両名がこの形態でいくことに決定すれば、結局は近い将来に何か手を加えねばなりません。公爵殿には設計図をお送りいたします。小さく狭いものではあっても、400人も対壕兵が20日もかかる代物です。もう一方の丘を要塞化したいという意思を抱きつつ、この仕事を進めます。』⁶⁾

つまり低いほうの丘（ステッラ要塞）の建設作業においては、ベッルッチがコロннаに譲歩しなければならなかったのである。要塞の設計も、大部分がコロннаに帰されねばならないだろう。そのことは、「ピッコ氏の権威には私など手も足も出せません」という別のコジモ宛ベッルッチ書簡からも明白である。

ステッラ要塞の建設作業は、コロннаの指揮下にベッルッチが推進したと考えることができる。5月3日、ベッルッチはコジモに「壁造りが始まり、メダル付きの最初の礎石が置かれました」と伝える。高いほうの丘（ファルコーネ要塞）については、すでにコジモは設計図を仔細に検討して拡張を決定していたが、いまだ着工にはいたっていない。海上に突き出たリングェッラの突堤の作業については、いまだ設計図すら作成されていない段階である。

このときコジモ一世はじきじきにエルバ島に出向いてステッラ要塞の建設作業を自分の目で

確かめた。いかに彼が要塞建設に並々ならぬ関心を抱いていたかを示すエピソードである。しかしその訪問の直後に、ベッルッチはステッラ要塞の拡張を企てる。それに対し、コジモは5月27日、拡張計画による作業の遅延を非難し、次のように厳命する。「土でできた要塞は、現状の形態のままの壁を造るべし。必要でないかぎり、城壁をもって拡張したり拡大したりしないこと。即刻、壁造りに着手すべし。議論や気まぐれに時を失ってはならない。有効有益なことのみに実行すべし。貴殿においては、たわむれにも城壁を完璧にしようなどとはつゆ思うべからず。……未決定部分と占星術の部分はそのまま放置すべし。われわれが残した状態で低いほうの要塞の壁を造るべし。形式張らないで急ぐべし。」つまり最初は石造の恒久的な要塞ではなく、土塁のような土造の暫定的な砦が計画されていたのである。

一方のファルコーネ要塞については、すでに基礎の掘削作業が始まっていたが、拡張を提案したベッルッチにコジモは同書簡で次のように述べる。「山を平坦にするうえで生じた問題点について、貴殿が作成した設計図について、ピッコ氏がわれわれに伝えてきた。もし最初の案が可能ならば、最初の案を実施すべし。それは貴殿の案よりも、われわれの気に入っている案だ。』⁷⁾

5月30日、ベッルッチは自分のやり方が正しいことをコジモに訴え、ステッラ要塞に必要な材料（石灰、タイル、レンガ、瓦など）の一覧表を作り、ファルコーネ要塞の形態についての公爵の決定を待ち、リングェッラの突堤には「半月堡（revelino）の形の防御施設」を構想している、と伝える。

6月7日、ベッルッチは、ステッラ要塞の正面に壁を建設する作業とファルコーネ要塞の基礎のための掘削作業の指揮をとっている。ファルコーネ要塞については、「いちばん大切な部分」の「鋏状建築部」（forbice）の基礎を掘削している最中で、設計図についてのコジモの最終判断を待っている。ところがその2日後、コ

ジモはコロナと相談して突然ベッルッチを変更し、代わりにカメリーニを送り込むのである。

このようにステッラ要塞の設計の発想においては、コロナの貢献が決定的だったと考えざるをえない。ベッルッチは予備的な作業を指揮し、壁造りに着手しただけである。ただしベッルッチはファルコーネ要塞の「鉄状建築部」を考案し、基礎の掘削作業を指揮した。おそらくは恒久的な要塞への転換も空想していたであろうが、決定的な転換の実施は、新たにやって来るカメリーニの仕事となるであろう。

従来、1548年5月段階における都市プランを示すものと考えられてきたベッルッチの平面図がある。しかしこれは実際には1552年に彼がポルトフェッライオに再来したときの図面であることが最近確認されている。彼が再来した理由は、仕事に未練があったからではなく、コジモのためにヨーロッパ中の重要な要塞都市の地図帳を作るためであった。コジモはカメリーニにベッルッチの視察に協力するように伝え、そしてカメリーニは1552年8月18日付コジモ宛書簡で、「さる15日来島し、サン・マリーノ〔ベッルッチ〕と会い、われわれは全域を見て回り、彼はこの地の平面図をほぼ仕上げました」としたためている。

しかし、結局この平面図は要塞都市の地図帳には含まれなかった。おそらく周壁の一部（両要塞の間）がまだ実現していなかったためであろう。カメリーニが計画中の情報を提供しなかったのに違いない。ベッルッチは未完成部分を空想で補い、心細い不正確な破線で線描している。突堤の先端の「リングェッラの塔」は八角形の平面で表現されているが、この塔は1549年にカメリーニが建設したものである。その前年の1548年にベッルッチが「半月堡 (revelino) の形の防衛施設」として構想していたものであった。

Ⅱ カメリーニの仕事

1. 要塞建設

1548年6月、ジョヴァンニ・カメリーニがエ

ルバ島に到着する。彼は1540年代の初めにコジモに雇われてピオンビーノの要塞建設に携わり、そして1544年にはトスカーナで最も有名な軍事技師のひとりとなっていた。というのも、その年、ピエルフランチェスコ・ジャンブッラーリが著作のなかで彼のことを次のように紹介しているからである。「彼は幸運からギリシア語もラテン語も文学を学ぶ機会を得なかったが、それでも自然から天賦の才能を贈られ、算術、代数、幾何学に対する気高い資質を有していた。それらの実践と研究におけるたゆまぬ勉学の結果、今日では誰も彼の右に出るものはいない。」⁸⁾

カメリーニが到着したとき、ステッラ要塞の細部は未決定のままであったし、ファルコーネ要塞にいたっては鉄状建築部のために穴が掘られただけであった。彼が実施することになる仕事は、(a) 要塞建設、すなわちステッラ要塞とファルコーネ要塞の建設続行、両要塞の恒久的な要塞への改造、リングェッラの塔の設計と建設、(b) 都市計画、(c) 周壁の要塞化、(d) 市内建築の建設である。

彼は早速ステッラ要塞の正門の図案を描いて、それを1548年7月29日にコジモに送る。その図案によれば、正門は加工した石のブロックが積み上げられ、低いところに通風口が穿たれ、高いところにはメディチ家の大きな紋章が掲げられている。しかし結局、実現されたステッラ要塞には低い通風口はないし（その代わりにファルコーネ要塞の正門のほうには通風口がある）、メディチ家の紋章もない（その代わりに現在はフェルディナンド三世の銘板が掲げられている）。

ところでこのステッラ要塞の正門には、ベンヴェヌート・チェッリーニが1548年に制作したブロンズ製の「コジモ一世の胸像」が1557年に置かれることになる。この眼光の鋭い胸像は、「鉄の意志」を内に秘めたコジモ一世の最高の肖像彫刻といってよい傑作である。もっとも作者にとっては、この傑作がエルバ島に運ばれることには不満だったであろうが。結局この胸像

はメディチ家の家系が途絶えた後のハブスブルク-ロートリンゲン家の大公ピエトロ・レオポルドによってフィレンツェに戻され、現在はバルジェッロ国立美術館に展示されている。

カメリーニは1549年3月から10月にかけてファルコーネ要塞の建設を指揮し、同年7月9日には、最初の礎石を置く起工式を挙行する。さらに彼はステッラ要塞とファルコーネ要塞を暫定的な土の砦から恒久的な石の要塞に造り変える。それが確認されるのは、とくに城壁の上張りや防御施設（狭間のある急斜面の回廊、ファルコーネ要塞の鋏状の凹角と突出部にある狭間）と配管設備（配水と給水のシステム）の点である。

1548年の年末に、カメリーニはリングェッラの八角形の塔を設計し、12月には地ならしのために200人の対壕兵（guastatori）を手配している。1549年3月には土地に線が引かれ、7月10日には最初の礎石を置く起工式が挙行される。1550年1月には持ち送り（beccatelli）と上部にふたつの兵舎をもつ軍需品貯蔵庫の4つのヴォールトのうちのひとつが完成する。さらに8月まで作業は続き、カメリーニはコジモに次のように報告する。「狭間を外に向けるために、塔の胸壁は側面から2・5プラッチョばかり張り出しているの、滑らかな胸壁は「敵が」塔に登ることを妨げます。」そして塔には「衛兵が仮眠することのできるレンガを積み上げた小部屋」⁹⁾が造られました、と。ナポレオンのフランス人技師の描いた図面では、塔がまだ16世紀当時のままであったことを示しているが、20世紀初頭の写真では、衛兵のためのレンガ造りの小部屋はもう存在していない。

カメリーニが造ったこの「リングェッラの塔」は、レンガと大理石の配合が絶妙であり、純粋で崇高な幾何学的形態をしている。19世紀前半まで、多くの軍事技師に豊かな示唆を与え続けた模範のひとつである。

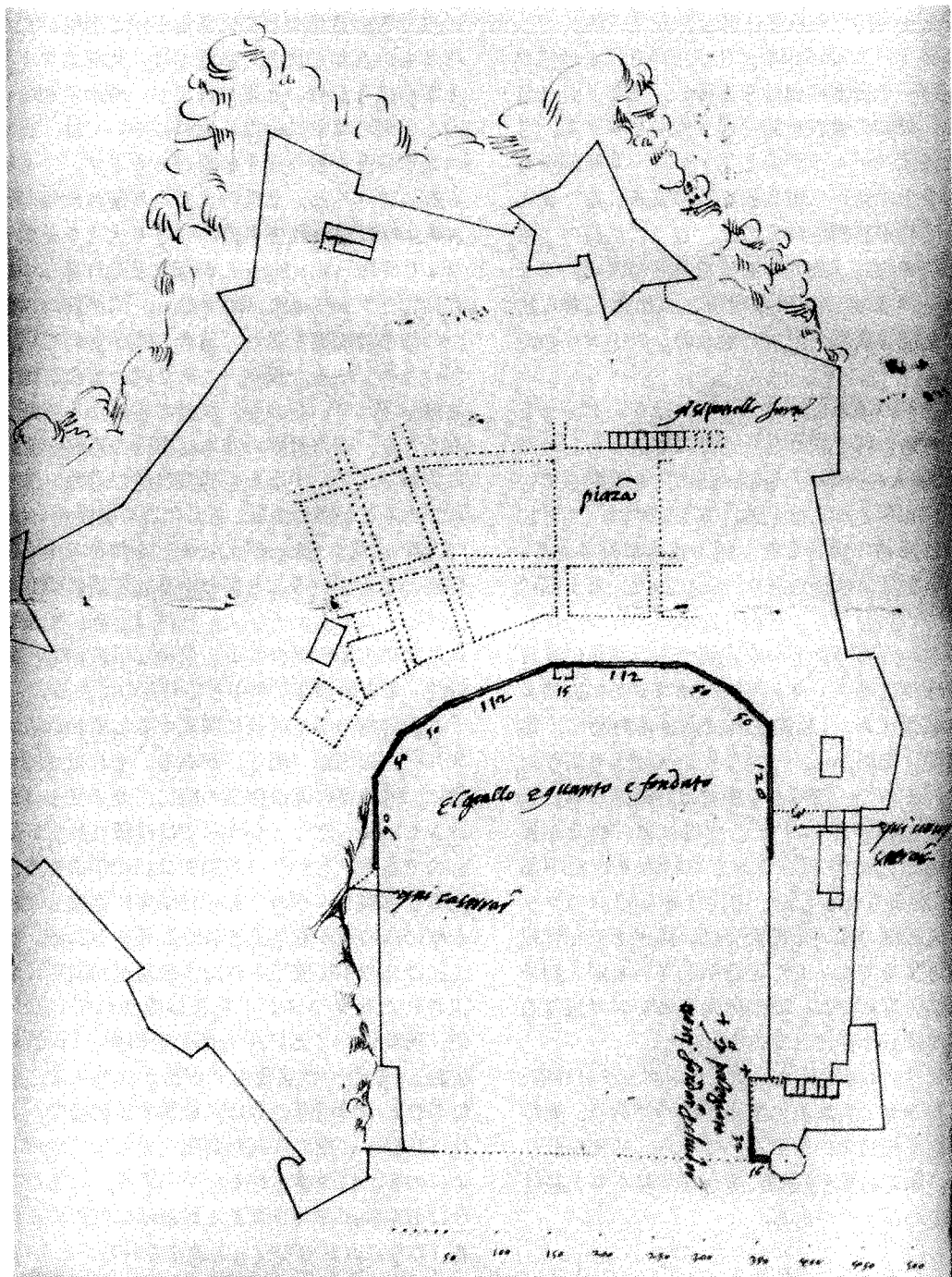
2. 都市計画

1549年6月19日、カメリーニはエルバ島から

コジモに包括的な都市計画案を送り、次のような書簡を同封する。「同封いたしましたこの地の図案によりますと、パラッツォ、広場、教会の点でその意思がどこにあるかがご理解いただけるものと存じます。私見では、見開きフォリオ版のほうが良いと思われます。海から劇場に沿って東の風車にいたる道路については、自然の地形を多少掘り返す必要があります。フォリオ版に比べると、立地の点でより優れた角が作れるように思われます。」¹⁰⁾つまり大きな見開きフォリオ版（40×30cm）の図案とそれを二つ折りにしたフォリオ版（30×20cm）の図案のふたつの都市計画案を送り、前者の案が優れているというのである。現在、この2枚の都市計画案は確認されていないが、同封の書簡から判断するかぎり、都市計画の基本は市内の道路が直角に交わること、すなわち碁盤目状の道路システムであることがわかる。さらにこの書簡からは、「武器の広場」（piazza d'Armi）を都市の中心的要素と考えていることがわかる。広場に面して公爵邸と大聖堂がそびえ、軍隊は前線に配備される前に広場に集合する。広場には政治的・宗教的・軍事的機能が集中しているのである。

この書簡の都市計画に関連すると思われるカメリーニの図面（図1）がある。それは1553年末に、港の壁の建設作業の際に、カメリーニがコジモに送ったことが今日では確認されているものである。しかしこの図面は1549年の都市計画案を再現し、そのうえに1553年に完成したばかりの港の壁が書き込まれたと考えられる。ここには1549年に着工された大聖堂や1551年に着工されたサクラメント教会は描かれていないが、興味深いことに中心部の道路網、「武器の広場」、ふたつの建物などが描かれている。建物のひとつは周壁のそばに位置する建物で、これは1552年に建てられた病院（のちに「ナポレオンの家」に改築される）であろう。いまひとつは道路網が方向を変える傾斜地に位置する建物（のちにコンセルヴェと通称される）である。この平面図では、ほぼ正方形の「武器の広場」の周辺の道路は、投錨地の港の自然の湾曲に直

図1 ジョヴァンニ・カメリーニ「ポルトフェッライオの都市計画の平面図」
 (1549年の平面図の上に1553年に着工された港の壁が追加)



出所) Fara, Amelio, Portoferraio, Architettura e urbanistica 1548-1877, Torino, 1997, fig. 33.

交するようにいろいろな方向にのびている。つまり湾内の中心から放射状に道路がのびているのである。理想都市の道路網は基盤目状か放射状かの二者択一が一般的であるが、ここでは基盤目状を基本にしながらも傾斜地などの地理的条件に従って放射状も取り入れた折衷型が採用されているのである。この道路網は現在の市街図上でも確認することができる。

カメリーニの都市計画は、16世紀にヨーロッパで建造されたすべての新都市と同様に、軍事的性格を帯びている。そこには、周壁の一方の前線から他方の前線への軍隊の迅速な移動を可能にする直線的な幅広の道路網が整備され、中世都市に見られるような曲がりくねった隘路や迷路のような袋小路はない。道路は単純明快、そして軍事的である。それが時代の要請であり、ヨーロッパ中に散らばったイタリア人技師が古い中世都市を「当世風に」(alla moderna) に改造する際の要諦のひとつでもあった。

カメリーニがポルトフェッライオで「大地の門」(porta di Terra) の位置を半稜堡の背後に選んだことは、サンガッロ流の都市計画の伝統を受け継いだ結果である。市門を確実に守るには市門は稜堡の近くに配置するのがよい、というのがアントニオ・イル・ジョーヴァネ・ダ・サン・ガッロ(1483-1546)の考えであり、逆に、市門は稜堡の陥落に巻き込まれないように稜堡から離して配置するのがよい、というのがフランチェスコ・マリア一世・デッラ・ローヴェレの考えであった。ひとつの市門を守るひとつの稜堡という発想は、バルダッサレ・ペルツィ(1481-1536)が建設したシエナの稜堡の場合にも見ることができる¹¹⁾。

さて、そのシエナは皇帝カール五世とコジモ一世の同盟軍に包囲(1553-55年)されて陥落する。そして皇帝の息子のスペイン王フェリペ二世によって1557年にコジモに封与される。こうしてトスカーナ全域がコジモのものになったが、ただしその際にポルトフェッライオを除くエルバ島など、いくつかの地域が「プレジディ国家」としてスペイン領に留まった¹²⁾。

ポルトフェッライオー都市だけでも既成事実として確保したいコジモは、1556年に新都市の住民に各種の特権を与えている。10年間のエルバ島全島の自由通行権、物品税と輸出入関税の免税特権など。また移住して自分の家を建てる者には、「無償にて公爵の純粹なる贈与により」建設用地を与え、土地と家屋の所有者として認める、と。しかし新都市への移住が速やかに進んだとはいいがたい。1562年10月6日、カメリーニがコジモに報告しているところでは、ある者は自腹を切って家と工房を建てることを望み、他の者は住み始める日から「一定期間毎年家賃の一部を支払うこと」を望んでいる、が移住は遅々として進まない¹³⁾。

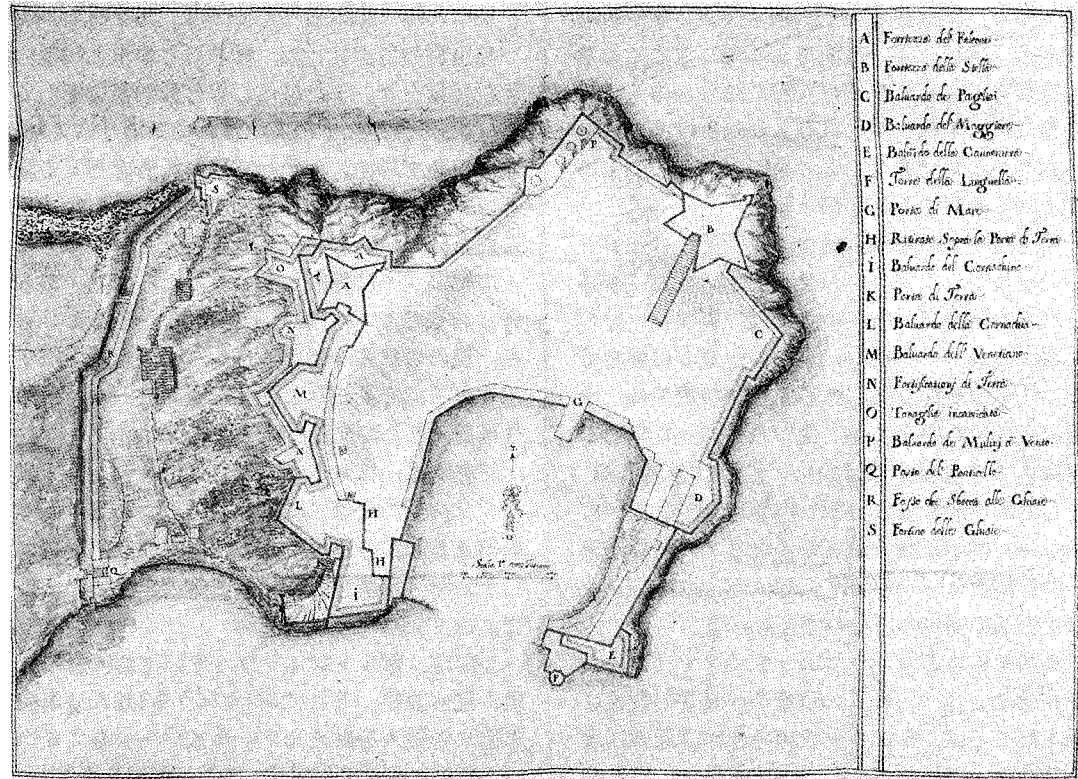
1565年は、カメリーニはもっぱらテッラ・デル・ソーレの仕事に従事している。都市計画の専門家としての資質が高く評価されて、トスカーナにおける新しい理想都市建設が任されたのである。

1566年、ポルトフェッライオには約90軒の住居が建ち並び、そこに463人(うち142人は未成年者)の住人を数えた¹⁴⁾。カメリーニも「6つの小部屋と葡萄酒貯蔵庫」のある家屋を所有し、兄弟のジュリアーノが住んだ。しかしいずれにせよ、家を建てる者には優遇措置がとられたにも関わらず、テッラ・デル・ソーレなどの新都市と同様に、やはり移住は速やかには進まなかった。

3. 周壁の要塞化

16世紀の都市はまったく新しい外観をもつことになる。それはグイッチャルディーニが「人間の道具というより悪魔の道具」¹⁵⁾と呼んだ大砲の出現に起因する。もはや中世の高い塔も跳ね出し狭間も必要ではなく、堅固な砲台や銃眼が必要になる。「ルネサンス期に発達したすべての建築形態のうちで、いちばん重要なものは稜堡である」¹⁶⁾とJ. R. ヘイルが述べるように、砲撃を防御すると同時に砲撃の基点ともなる、鋭角的に突き出た稜堡が都市の外観を一変させるのである。

図2 フェルディナンド・タッカ (?)「ポルトフェッライオの要塞の平面図」
(17世紀中葉)



出所) Ibid, fig. 145.

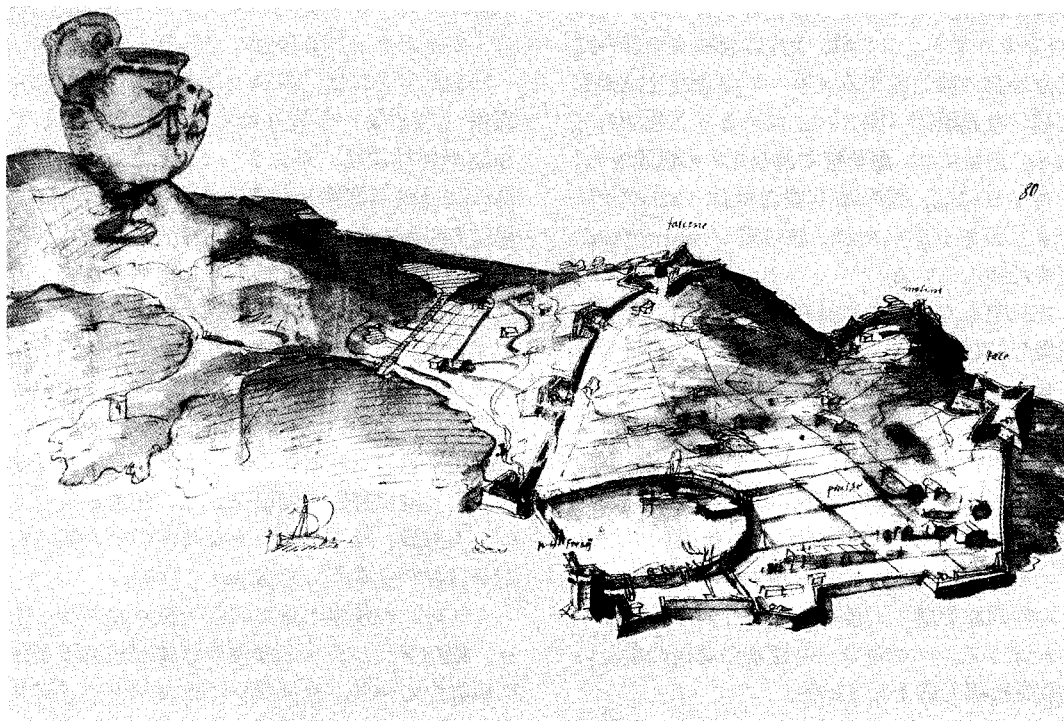
訳注) A=ファルコーネ要塞。B=ステッラ要塞。C=パリアーイの稜堡。D=マッジョーレの稜堡。E=カンノニエーラの稜堡。F=リングェッラの塔。G=海の門。H=大地の門の上の稜堡。I=コルナッキアーノの稜堡。K=大地の門。L=コルナッキアーノの稜堡。M=ヴェネツィアーノの稜堡。N=大地の砦。O=外壁のあるやっとこ型砦。P=ムリーニの稜堡。Q=ポンティチェッロの門。R=ギアイエに注ぐ堀。S=ギアイエの小砦。

1549年6月19日、カメリーニは包括的な都市計画案をコジモに送った際に、3つの稜堡で構成される周壁の要塞化の進捗状況を報告している。「新しい周壁は可能なかぎり進捗しています。第一の稜堡は、対発破孔 (contramina) の部分を除いて、側面が8ブラッチョ、高さが7ブラッチョあり、全面に2つの正面を備えています。第二の稜堡については、稜堡の上部が約7ブラッチョと小さくなっていますが、……この第二の稜堡に着手することをお望みなのか、第三の稜堡なのか、あるいは順次中庭を造り続けることなのか、公爵殿のご所望がわかりますれば、幸いに存じます。」¹⁷⁾ 君主と建築家は稜堡

への強い関心を共有しているのである。

1550年には、カメリーニは港の停泊地を鉄と木の鎖で閉鎖する仕事を指揮し、1551年4月から12月にかけては、周壁の要塞化の事に全精力を集中する。すなわち大地の門から時計回りを見ていくと、門の半稜堡 (コルナッキアーノの稜堡)、大地の正面の半ばの稜堡 (コルナッキアーノの稜堡)、ファルコーネ要塞の下の稜堡 (ヴェネツィアーノの稜堡)、ファルコーネ要塞、ファルコーネ要塞とステッラ要塞の間の半稜堡 (ムリーニの稜堡)、ステッラ要塞、サッシの下の半稜堡 (パリアーイの稜堡)、海の正面の半ばの稜堡 (マッジョーレの稜堡)、リングェッ

図3 ジョヴァンニ・カメリーニ (?)「ポルトフェッライオの鳥瞰図」(1553年頃)



出所) Ibid, fig. 134.

ラのそばの海の半稜堡（サン・コジモの稜堡あるいはカンノニエーラの稜堡）である（図2参照）。

1551年6月には周壁の仕事の進捗状況を知らせる。同年6月には、大地の正面の前に「コントラフォッシ」(contrafossi)と呼ばれる盛り土の斜堤の計画を練っている。これはとりわけピオンビーノにおけるレオナルドの発想から影響を受けたものである。9月にはファルコーネ要塞で宿泊所が建設中であり、「砲台はすべて終了して、ステッラ要塞のほうを向いた胸壁が造られている」ところであり、ステッラ要塞では、港のほうを向いた銃眼が建設中である。

1552年4月9日、「海の半ばの稜堡〔マッジョーレの稜堡〕」の建設がすでに完成半ばまで進み、「砲台と側面の奇抜な家」は外壁が完了ししだい着手すること、大地の門には「石造り

のアーチが架けられた」こと、「〔港を閉鎖する〕鎖は今月いっぱい、そのままにしておく」ことなどがコジモに報告される。同時に、ファルコーネ要塞とステッラ要塞のあいだに風車を設置するための凸角、つまりのちにムリーニ（風車）の稜堡と呼ばれる部分の設計図も送られる。すでに1548年にコジモはバスティアーノ・カンパーナに風車のための挽き臼を一基発送させ、風車が敵の砲撃から守られる位置に設置されることを望んでいたのだった。

1552年のあいだは、周壁の要塞化の仕事のなかでも土塁(terrapienamento)の仕事が進められ、サッシの下の稜堡（パリアーイの稜堡）は8月11日に完成し、12月には港の鎖が断ち切られる¹⁸⁾。1553年の2月と5月には、カメリーニはプロリオの実地調査のために一時ポルトフェッライオを離れることもあったが、しかし、

その年の間中はポルトフェッライオの大地の正面に、ふたつの稜堡の前に「コントラフォッシ」(contrafossi)を建設する作業を指揮する。その「コントラフォッシ」は、1553年頃にカメリーニ自身か彼の協力者がカメリーニの意図を反映して描いた鳥瞰図(図3)にはっきりと描かれている。10月には、港を壁で囲むための測量をし、12月7日には、港を取り囲む壁は「420ブラッチョ」が仕上がったが、扶け壁(contrafforti)がまだ残っている。

1554年もカメリーニは周壁と港の壁の仕事を指揮し続けるが、1554年から1557年まではピオンビーノに実地調査に赴き、1557年には、マッサ・ディ・マレンマとバルガ、1558年にはポルト・エルコレに赴く。

多忙なカメリーニに代わって、1558年5月、ポルトフェッライオの要塞化の仕事にガブリオ・セルベッローニが初登場する。彼はカメリーニの同意を得て大地の正面の仕事を続行するいっぽうで、ファルコーネ要塞の北側の新しい正面を計画し着工している。

1565年2月、すでに着工していた大地の門の上の宿舎のために、カメリーニは、彼自身が作成した平面図をカストロカーロ(そこにテッラ・デル・ソーレの仕事のために滞在していた)からコジモに送る。彼が考えるには、そのような宿舎は、門の上に位置する大砲の砲座のために、広い眺望を邪魔してはならなかった。コジモ宛書簡で明言するように、彼の平面図には「ペンだけで描いた点線がありますが、しかし黄色い〔水彩の〕部分と屋根は平面から1ブラッチョ〔約60cm〕高くなってもいけません。」さらにこの図面の面白いところは、中庭のほかに「いとも尊き公爵夫人の菜園」が計画されている点である。斜堤の外側の土地が、防衛の邪魔にならない限りにおいて、菜園を造るためにコジモが私有すべき場所と設定されているのである¹⁹⁾。

4. 市内建築

カメリーニが市内に企画した建物は、兵站的

機能をもつ建物(ステッラ要塞の大公邸、病院、ビスケット工場、造船所)と宗教的な建物(大聖堂、サンティッシマ・サクラメント教会、サン・フランチェスコ教会)である。

1549年8月には、ステッラ要塞に「4つの大部屋〔大公邸〕を造り始め」ている。そして1558年10月17日、カメリーニは、「ステッラ要塞の公爵殿の諸室が仕上がろうとしています。他に方法がなかったのでレンガを敷き詰めることにいたしますが、どのようにすべきか御下命くだされば、間にあう限り、そのようにいたす所存です」とコジモに述べる。その建設作業は1559年も1560年も続いている。結局、大公邸は17世紀には総督(governatore)の邸宅となり、18世紀には17世紀初頭のクラウディオ・コゴラーノの設計に従って拡張される。16世紀の「4つの大部屋」は、ナポレオン時代の平面図にも司令官舎の倉庫として描かれている。

ムリーニの稜堡の近くには、長さ40ブラッチョ、幅13ブラッチョの病院の建物が1552年9月に建設中であり、カメリーニはコジモに「天井部分を除いてすべて順調に進んでいます。床はまだレンガが敷かれていません。屋根はすべて木材です」と報告している。この建物は、19世紀初頭にいわゆる「ナポレオンの家」に改築されることになる。

ビスケット工場は、ガレー船の漕手のためにビスケットを焼く竈のある兵站的な意味で重要な建物である。1559年3月1日に着工し、9月には穀物倉庫が仕上がって8基の竈が建設中である。1560年1月には、「竈の部分がほぼ完成し、……竈の前の回廊の建設を残す」のみである。回廊については、2月に「角柱なしに建設するよう命令が」下される。1560年と1561年もビスケット工場建設の仕事は続いている。16世紀と18世紀の平面図を比較してみると、両者のあいだにほとんど違いはない。カメリーニの造った井戸はいまも中庭に存在しているが、かつての重要性を失った現在のビスケット工場の建物は、著しく醜悪なものとな化している²⁰⁾。

カメリーニは1561年に造船所のための二棟の

建物の設計図を作成する。6月には、「造船所の穴を掘り、角柱の土台」を造る命令が下されるが、10月になってもまだ角柱に着手されず、結局は、資金不足のためであろうが、建設の中断を強いられる。造船所の完成は、ブオンタレンティの登場を待たねばならない。

宗教建築では、カメリーニの設計に従って、すでに1549年に中央の身廊だけをもつ大聖堂が着工されている。その後、大聖堂は16世紀末、1699-1700年、1783年と拡張・改築されることになる。現在の大聖堂は、中央の身廊の両側に側廊をそなえている。また1551年には、サンティッシマ・サクラメント教会が起工されたことが、門の上の銘板に刻まれている²¹⁾。

都市にとってきわめて重要な建物は、フランチェスコ会の修道院と教会堂である。1558年10月にカメリーニはコジモに次のように報告する。「公爵殿が私に委嘱された通りに、サン・フランチェスコ会の修道院が着手されました。委嘱通りの場所に穴が掘られ礎石が置かれます。15日以内には、慣例通りの儀式をとまなつて起工の運びになると存じます。」そして12月になって起工式が挙行され、「聖アンドレアの祝日の朝、サン・フランチェスコ教会の祭壇になる予定のその場所で、荘厳ミサが唱えられました。」1559年9月には修道士の宿舎の屋根が造られ、1560年1月には諸室と厨房が造られているが、大食堂にはまだ屋根がない。

1561年4月、「時計をビスケット工場に設置するか修道院に設置するか」をめぐって、ガレー船の将校と陸軍将校のあいだに意見の対立が生じる。カメリーニは修道院が適当だと考えるが、コジモに助言を求め、コジモが最終的に修道院のほうを選んでいく。5月には修道院の客室が造られ、時計が設置される。1562年10月にはまだ修道会の教会堂と井戸が建設中である。

サン・フランチェスコの建築複合体は、完成後何度も改築されたが、18世紀初頭の略図やら、1806年にフランス軍の兵舎にされたときの詳細な測量図やらによって、往時の再現と分析が可能である。教会堂は長方形の平面プランをもち、

内陣席は半円アーチによって建物の他の部分から区切られている。両側面には、入って左側に2つの礼拝堂（サンタ・バルバラ礼拝堂、サン・フランチェスコ礼拝堂）、右側に1つの礼拝堂（サントニオ礼拝堂）があり、地下には地下礼拝室がある。18世紀の図面と19世紀の図面を比較すると、19世紀にはもはや大祭壇もなければ、サントニオ礼拝堂、サン・フランチェスコ礼拝堂、サンタ・バルバラ礼拝堂の各祭壇もない。左の側壁からは「総督が説教を聴く席」「S. A. R.のピエタの祭壇」、司教の席が消え、右の側壁からはサンティッシマ・アヌンツィアータの祭壇、説教壇、サンティッシマ・コンチェツィオオーネの祭壇が消え、入口の壁からはマドンナ・デリ・アンジョリの祭壇とサン・ジュゼッペの祭壇が消えている。左の側壁では、サンタ・バルバラ礼拝堂が教会堂の空間から切り離されて遮蔽され、現在のように、サン・フランチェスコ礼拝堂からサンタ・バルバラ礼拝堂に出入りするようになっている²²⁾。

教会堂のファサードは、門の上に円形の窓があるだけのシンプルなものである。教会堂の右側は二階建ての修道院と接している。修道院の中庭にある角柱の柱頭や持ち送り積みは、大聖堂のものや、ステッラ要塞の入口の斜路のものとよく似ている。中庭の地下には、井戸を囲んで貯水槽の役割をする半円筒天井の諸室がある。カメリーニは他の軍事技師と同様に洗練された水力学的教養を身につけており、その教養はやがてブオンタレンティに引き継がれていくことになる。

サン・フランチェスコの建築複合体は、その後、イタリア王国の軍事技師の手によって、1859年、1869-70年、1872年に改築されて兵舎にされた。

Ⅲ ブオンタレンティの要塞都市の完成

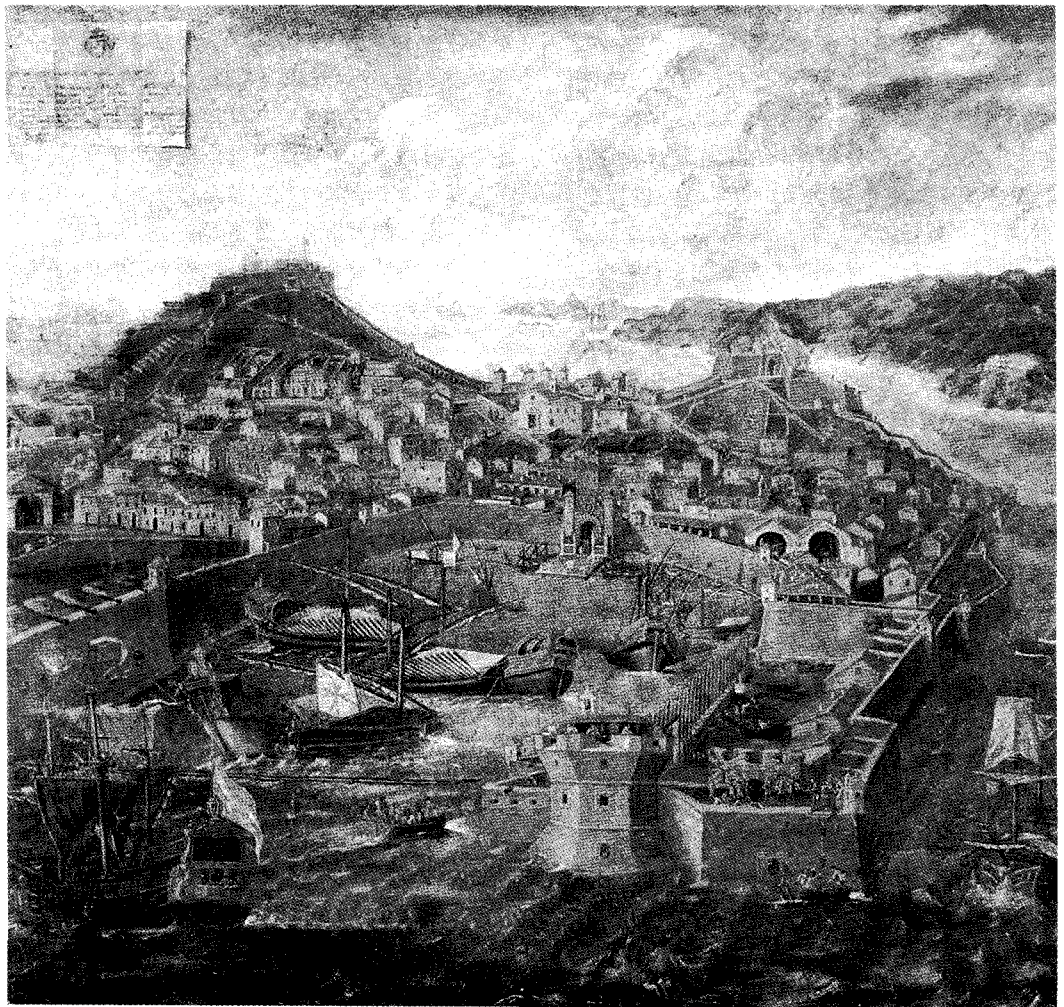
1570年にカメリーニが死去した後、ポルトフェッライオはバルナルド・ブオンタレンティ

(1536-1608)の手によって16世紀の姿を完成することになる。1566年には90軒だった家屋も、1574年には約140軒を数えるまでになる²³⁾。各種の特権が奏功したかどうかは断定できないが、船材のための倉庫の数が著しく増加していることから、ブオンタレンティによる「ガレアツツェ（ガレアス船）の造船所」の実現に向けた準備が着々と進んでいることが窺える。

カメリーニが中断した造船所の建設をブオンタレンティが再開するにあたって、ブオンタレ

ンティが1571年に最もよく研究し、最も大きな影響を受けたのはカメリーニの計画案だったに違いない。そしてそれをピサの造船所にも応用できるとも考えたに違いない。造船所はその建設用地もその構造も、おそらくはカメリーニによって方向づけられたものである。が、いずれにせよ「ガレアツツェの造船所」は、ブオンタレンティの設計図に従って、1575年の初頭に、港の近くの倉庫地区に半円筒アーチの拱廊が平行して並ぶ二棟の建物として完成する（図4参

図4 作者不詳「ポルトフェッライオの景観」（1688年頃）



出所) *Ibid.* fig. 154.

照)。その後、造船所は1693年に再建されることになるが、ナポレオン時代には倉庫として、また現在は市場として使用されている²⁴⁾。

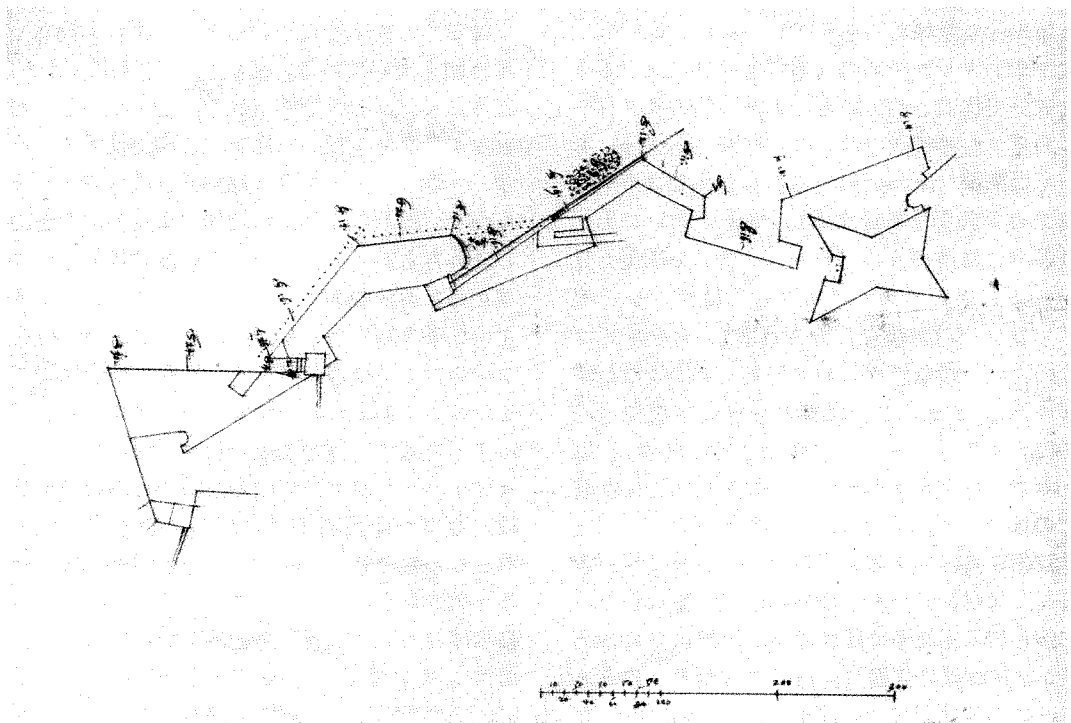
ブオンタレンティは風車も建造した。風車は包囲戦時に要塞都市を十分に機能させるためには必要不可欠な兵站的建造物である。風車はすでに1552年にカメリーニがムリーニ（風車）の稜堡に1基建造し、1554年にはコジモがもう数基建造するように要望していた。カメリーニの1基の風車は前述の鳥瞰図（図3）のなかにも描かれている。ブオンタレンティはムリーニの稜堡に数基の風車を追加したものと思われるが、ともあれ17世紀のフェルディナンド・タッカ（?）の平面図（図2）にも作者不詳の景観画（図4）にも、計4基の風車が並んで描かれている。

ブオンタレンティは都市の防衛機能の改善を

考えて、大地の正面（fronte）の新しいプランを企画する。1574年にボナイウート・ロリーニが大公フランチェスコ一世から指令を受けてその仕事を担当するが、彼は気乗りがしないようで、別の拡張案を企画する。それには1575年1月、大公が反対する。大公の指示内容は、ブオンタレンティの考えと完全に一致するものである。

ブオンタレンティと大公フランチェスコが考えるには、新しい大地の正面はカメリーニの造った大地の正面を完全に包含する形のものであればならない。この奇抜な発想は、アントニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョーヴァネがカストロ市のために提出したプラン（それはドメニコ・モラが1567年にコジモ一世に献呈した論文のなかに再録）をブオンタレンティが研究するうちに閃いたものに違いない。しかし大地の

図5 作者不詳「ポルトフェッライオの大地の正面の図面」（16世紀末）



出所) *Ibid.* fig. 104.

正面の計画で衝撃的なのは、サンガッロの発想を想起したことなく、むしろその場所の地形が要求する建築上の必要性を完全に把握していたことである。ブオンタレンティは、建築家として、ときには奇抜な夢想家であるときにも、つねに建築上機能的な構造を実現してきた。だからこそ、彼の大地の正面は、遅ればせではあっても、早晚実現せざるを得ない運命にあったのである。建設は、1575年4月にベルナルド・ブッチーニが指揮官となって実施する²⁵⁾。

ブオンタレンティは1574-75年の大地の正面の図面のなかで、「外壁を外に拡張し」、前に土を盛り上げ、「まわりを断崖にする」すなわち急な斜堤を造ること、を決定している。さらに彼が記すには、「約100ブラッチョ幅の堀」を造り、その堀と各稜堡のあいだに斜堤を造る。さらにその斜堤の土の上に「公爵夫人の庭園」と書き込みをしている。この「庭園」はカメリーニの「菜園」の変形である。菜園であれ庭園であれ、防衛的射程の視界が開かれている空き地に定められていることを考えれば、それはやはり軍事的な意味あいを帯びているのである²⁶⁾。

ブオンタレンティの大地の正面は、次のような部分で構成されている。大地の門のカメリーニの造った半稜堡の前には、外壁(cortina)もしくは障壁(traversa)(これら全体でコルナツキアの半稜堡を形成する)。ブオンタレンティ稜堡(これはパッレ・ディ・ソットの稜堡とカジーノ・ディ・メッツォもしくはパッレ・ディ・ソブラの稜堡に二分される)。スパンノッキの稜堡(のちにヴェネツィアーノの稜堡と呼ばれる)。ファルコーネ要塞を守る半稜堡(のちにカルチョファイアの稜堡と呼ばれる)。以上のようなブオンタレンティの正面は、16世紀末の図面(図5)に正確に再現されている。1587年6月に「ブオンタレンティ稜堡に壁が造られ、スパンノッキの稜堡には土が盛られた。」しかし17世紀初頭の図面では、周壁にブオンタレンティ稜堡の表面(facce)と大地の門のカメリーニの半稜堡の前の障壁(traversa)の表面(facce)が実現しているだけで、完成にはほど

遠い。結局、ブオンタレンティの偉大な精神を宿す大地の正面は、18世紀になって、いわゆるアルテージの外壁が造られてようやく完成にこぎつける。

結びにかえて～ヴァザーリの絵画

理想都市としての要塞都市ポルトフェッライオは、ドメニコ・ポッジーニとピエトロ・パオロ・ガレオッティの鑄造したメダルに刻まれ、あるいはフィレンツェのインノチェンティ捨児養育院にベルナルディーノ・ポツチェッティが描いたフレスコ画など、さまざまに描かれてきた。しかし、ここではジョルジョ・ヴァザーリが1557年頃にフィレンツェのパラッツォ・ヴェッキオの「コジモー世の間」に描いたフレスコ画「ポルトフェッライオの建都」(図6)を紹介することにしたい。

この作品には1553年の鳥瞰図(図3)の影響が見られるが、それよりももう少し高い視点をもっている。そして視点を固定した一点透視図法ではなく、画中で視点の高度を自由に移動させる技法を用いている。そのため鳥瞰図(図3)にカメリーニの平面図(図1)を上から張り付けたようなあんばいである。この技法は、ヴァザーリの「フィレンツェ包囲戦」にも見られるもので、対象を立体的に把握しようとする苦心の表れだといえる。ただしこの絵にはいくつか不正確な部分がある。もちろんブオンタレンティの仕事を知らないのはよいとしても、例えば、ファルコーネ要塞とステッラ要塞の形状は著しくいびつであるし、ファルコーネ要塞にはすでにあったはずの稜堡の築かれた正面と「コントラフォッシ」が欠けている。ムリーニの稜堡は曖昧なためか円周の外に出してごまかしている。しかしそれらを除けば、地形学的にはかなり正確である。そして何よりもヴァザーリは新都市建設という祝賀的雰囲気醸し出すことに成功している。円形画の額縁には「ANNO MDXXXVIII」つまり1548年とある。ヴァザーリはカメリーニの図面も建都の年も熟知して

図6 ジョルジョ・ヴァザーリ「ポルトフェッライオの建都」(1557年頃)



出所) *Ibid.*, fig. 136.

いるのである。

この絵について、ヴァザーリはコジモ一世の息子のフランチェスコとの架空の対話を記した『ラジوناメンティ』という本のなかで以下のように解説している。

ヴァザーリ「この第二の円形画はエルバ島のポルトフェッライオで、御父君によって建造されたステッラ要塞とファルコーネ要塞が描かれています。私は、いま現在ある通りのすべての道路と城壁を遠い視点から描きました。」

公子「これ以上のできばえはないね。公爵がここでご覧になっているのは何の平面図かしら。ねえ、教えてよ、何なのか。」

ヴァザーリ「すべての周壁と要塞の平面図です。かの都市の建築家ジョヴァンニ・カメリーニ氏が提出したものです。カメリーニの隣りは、

要塞の長官ルカ・マルティーニと秘書官ロレンツォ・パーニの写実的な肖像です。パーニ氏は、ご覧の通り、かの都市をコスモポリ市と呼ぶことを定めた御父君の作成された契約書を手にしています。」

公子「全部うまくできているよ。父上の足元には侏儒モルガンテの写実的な肖像が見えるね。ほら、あそこの遠いところには、女性を抱いたネプトゥヌスが、三叉の矛を手にして海の馬を御しているけれど、いったい何を意味するの。」

ヴァザーリ「かの女性は《安全》を意味します。御父君がかの都市を建設されたことにより、国家と海洋にこのうえない安全をもたらされたことを物語っているのです。」²⁷⁾

ポルトフェッライオがサント・ステファノ騎

士団の海軍基地となるのは、この絵が描かれてから5年ばかり後の1562年のことである。コジモ一世は海軍創設に先だって、まず海軍基地を建設したことになる。

大公フランチェスコ一世時代の1581年、ポルトフェッライオは約150軒の住居に653人の住民を数え、大公フェルディナンド一世時代の1590年には、住居数はほぼ同数であるが、住民の数は1237人に増加する²⁸⁾。17世紀には、図4の油絵からも窺えるように、サント・ステファノ騎士団のガレー船が多数停泊して「鉄の港」は殷賑を極めることになる。

注

- 1) *Guida rapida d'Italia 3, Touring Club Italiano*, Milano, 1986, pp. 93-95.
- 2) *Guida d'Italia: Toscana, Touring Club Italiano*, Milano, 1974, pp. 701-702. 1972年現在も約500人の鉱夫がいて、鉱物の産出量は年間50万トンを超えるという。
- 3) 中嶋和郎『ルネサンス理想都市』講談社、1996年、154ページでは、16世紀イタリアの理想都市として、ポルトフェッライオ、テッラ・デル・ソーレ、リヴォルノ、サッピオネータ、バルマノーヴァの5都市をあげている。前三者がコジモ一世の建設した都市である。
- 4) Spini, Giorgio, "The Medici Principality and the Organization of the States of Europe in the Sixteenth Century," *The Journal of Italian History*, 1978, p. 424.
- 5) Fara, Amelio, *Portoferraio. Architettura e urbanistica 1548-1877*, Torino, 1997, p. 6. ファラの研究書は、従来混乱していた要塞と都市の建築家を整理し直し、書簡史料と図面史料に基づいて建設過程を再現したすぐれた研究書である。書簡史料の多くはフィレンツェ国立文書館 (ASF, *Mediceo del Principato*) 所蔵のものである。

- 6) *Ibid.*, p. 6.
- 7) *Ibid.*, p. 7.
- 8) *Ibid.*, p. 9.
- 9) *Ibid.*, p. 10.

- 10) *Ibid.*, documento 1, pp. 57-58に全文収録。
- 11) Pepper, Simon and Adams, Nicholas, *Firearms and Fortifications: Military Architecture and Siege Warfare in Sixteenth-Century Siena*, Chicago, 1986, p. 80.
- 12) シエナ戦争とその結果については、Cantagalli, Roberto, *La Guerra di Siena (1552-1559)*, Siena, 1962. プレジディ国家については、D'Anna, Cesare, *Lo Stato dei Presidi*, Roma, 1989.
- 13) Fara, *op. cit.*, pp. 12-13.
- 14) Battaglini, G. M., *Cosmopolis Portoferraio medicea, Storia urbana 1548-1737*, Roma, 1978, pp. 253-255.
- 15) Guicciardini, Francesco, *The History of Italy*, trans., London, 1754, vol. I, pp. 148-149.
- 16) Hale, J. R., "The Early Development of the Bastion", *Europe in the Late Middle Ages*, eds. J. R. Hale, L. Highfield and B. Smalley, London, 1965, p. 466.
- 17) Fara, *op. cit.*, p. 13.
- 18) *Ibid.*, p. 15.
- 19) *Ibid.*, p. 16.
- 20) *Ibid.*, p. 19.
- 21) *Ibid.*, p. 17.
- 22) *Ibid.*, p. 18.
- 23) Battaglini, *op. cit.*, pp. 255-261.
- 24) Fara, *op. cit.*, p. 20.
- 25) *Ibid.*, p. 21.
- 26) *Ibid.*, p. 22.
- 27) Vasari, Giorgio, *Le Opere di Giorgio Vasari*, a cura di G. Milanesi, Firenze, 1906, VIII, p. 191.
- 28) Battaglini, *op. cit.*, pp. 261-262.

(1999年10月6日受理)